

食にかかわる専門家をささえる

NPO法人 食生態学実践フォーラム



〒169-0075

東京都新宿区高田馬場 4-16-10 コーポ小野 202

TEL & FAX : 03-5925-3780

2011.3.31 Vol.25

E-mail : forum0314@angel.ocn.ne.jp

http://www.shokuseitaigaku.com/

東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます

東日本大震災に、私たちの“フォーラムの力”を活かしたい

3月 11日午後、未曾有の超大震災で被害に遭われた多くの方々、フォーラム会員や関係者の方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早く“普通の生活、自分らしさを発揮できる生活・社会活動”へと回復・復興できることをお祈り申し上げます。微力ですが、私たち食生態学実践フォーラムの特徴を活かした協力・支援をさせていただきたいと思っております。

大地震、津波、福島原発事故、食事が食べられない、生きられない……という“厳しいマイナスの連鎖、複合的・重層的な循環”を人間らしい食を復権する“プラスの循環”へシフトしたい！～多様な専門力と個性をどう発揮するか～

NPO法人 食生態学実践フォーラム理事長 名古屋学芸大学健康・栄養研究所所長

足立 己幸

「人間・食物・地域の循環図」のすべての拠点が押し流されている現地

3月11日午後、あっという間の大地震・津波と、じわじわと広がり続く数えきれないほどの余震が、海から陸へ遡上し、漁場・農場、工場・流通機関、役所・病院・施設・学校、家々、人々などのすべてをさらっていく壊滅的な連鎖が起きました。

さらに、これらのすべてを加速する原発事故とその影響……今回の大震災の恐ろしさは、生活も生産もすべてを壊滅的に破壊する“連鎖性”、しかも“複合的・重層的な循環性”にあるといえましょう。食生態学実践フォーラムが人間らしい食とは？その実現策は？を考える基本的な枠組みである「人間・食物・地域(食環境)の循環図」のすべての拠点が壊滅するという事実です。今も、大小の余震が連発し、深刻さを増しながら、“マイナスの循環”を続けています。

私たちフォーラムとして即支援活動ができなかった無力さを詫びたい

毎日、テレビや新聞等は、「一番困っていることは水、食物、特に乳幼児や高齢者が食べられるものがない……」と繰り返し報じています。東北地方の本会員が、勤務先で被害対応に窮していることを知りながらも、フォーラムとしては即協力・支援ができないままで、大変申し分けなく、慙愧です。「世界中一人残らずの人々に、いかなる時も人権としての食の保証(安全で栄養的に望ましい食物へアクセスできる食の保証)の実現」を活動のコンセプトに掲げているフォーラムなのに……。

問われるのはマイナスの循環を位置づけた

「人間・食物・食環境の循環図」を共有すること

即支援活動ができなかった理由の一つは、循環図についてプ

ラス面だけを見て、その裏側のマイナス面との関連でとらえてこなかったことだと反省しています。視野としては持ちつつも、循環図に位置づけていない、表現していない(表現するほど重視していない?) ことにあるように自戒します。豊かな自然の威力・エネルギーは(人間にとっては) マイナス面で保有されているエネルギーでもあると、とらえる必要があるでしょう。自然は恐ろしいのではなく、両面を持つのが“自然”だと思います。

今、フォーラムとして何ができるか、やらねばならないか？

多様な専門分野の人々からなる会員構成の特徴を活かして、それぞれが可能な活動を進めることが一番でしょう。他の組織の活動に加わって、自分の専門性や個性を存分に発揮することも重要と考えます。

○昨年の総会で「森は海の恋人」の基調講演をいただいた畠山重篤氏は、海も仲間も壊滅の渦でした。早速に支援活動が組織されました(森は海の恋人緊急支援の会 tel:0774-33-2503) ので、経済支援や技術支援を申し出ました。

○日本栄養士会(<http://www.dietitian.or.jp/index.html>) やユニセフ(<http://www.unicef.or.jp/index.html>) も具体的な活動を始めています。

○フォーラムがサポーター養成を全国展開する「さかな丸ごと食育」活動の基本教材である「さかな丸ごと探検ノート」(5月下旬発行、会員に配布予定)の「さかな・人間・環境の循環図」に「マイナスの循環」について加筆しました。

フォーラム会員が新しい食環境観を育てつつ、発信し、東日本大震災が大きな犠牲のもとで提起してくれたもう一步踏み込んだ「人間・食物・食環境の循環図」を展開していくことを願います。

■秋田から

被災直後から、本学（日赤秋田看護大学）に隣接する日赤秋田病院からは、日赤石巻病院への支援部隊が連日派遣されています。病院の後方部隊の支援としては、本学看護学生が病院のボランティアにあたっています。また、学生は、県や日赤支部に寄せられる救援物資の仕分けや、街頭募金活動と春休み返上にて活動しております。

3月24日からは、本学看護教員も日赤石巻病院、陸前高田町への応援部隊として交替にて参加しています。看護師・保健師として、刻一刻と伝わる悲惨な状況への対応、また、変化する現地の人々の暮らしへの対応など、課題は山積しております。

看護としては、被災直後の急性期の状況から、疲弊する心身の状態への対応、家族を失った哀しみが蘇る心のケアが必要となる時期です。また、乳児や子どもの感染症、老人や慢性疾患のある人への対応等、課題が山積されており、医療人の手が不足している現状です。陸前高田町では、救援施設や壊れた自宅で生活している人の訪問が始まり、健康状態の実態の把握や具体的な対応、心のケアが開始されました。

長期化する状況をふまえて、現場での医療のシステムを整え、ケアの維持・継続を図ることができるように整えることも必要と考えています。

尾岸恵三子（日本赤十字秋田看護大学、フォーラム理事）

■高齢者施設での栄養士に向けて

災害時には、断水と停電、食材の流通対策が大切とされてきました。短時間ながら長期間続く計画停電は、想定外でした。今後は、長期になるほど栄養ケアに気を配る必要があるでしょう。私の経験から、高齢者施設の栄養士に向けて、以下を挙げてみました。

①栄養士だけではできないことが多いので、職員の協力体制や利用者さんへの周知を施設全体で検討すること。

②調理者と協力して献立を見直す。温かい食べ物や水分の確保に適す汁の多い食べ物、食欲のない時でも食べやすい果物缶は献立に必須。

③非常用備蓄食料は、入所者及び職員分だけでなく、地域の高齢者の受け入れ分も考慮する。できれば1週間分はほしい。調理工程で最後になる主食だけが間に合わない場合もあるので、主食は多く用意する。

④非常食はミキサー食、キザミ食、ソフト食（以下形態食とする）に対応する、または展開しやすいものを選ぶ。

⑤温度の管理がきちんとでき、調理時間が短縮できるスチームコンベクションやチラー、形態食に必要なミキサーやフードプロセッサーだけでも、非常電源を確保する。

⑥盛り付け作業に使えるベッドランプとその電池も備蓄品へ。

⑦食器は使い捨ても備蓄すべきだがゴミになる。漬け置き洗いができるときは多用する食器の数を3回転分揃えておくとよい。

⑧高齢者は「戦争の時に比べたら何とものないわよ」と言って平静な方も多い半面、食欲が落ちたり、気持ちが落ち着かなくなる人がいる。

これからは、停電の合間にお花見の行事食も提供して、少しホッとしてもらおうと思っています。

野渡祥子（老健施設管理栄養士・正会員）

■保育園で

子どもの命を守るために、ライフラインが滞った地域、原発の影響で計画停電や水・食品汚染の問題を抱えている地域において、保育園関係の皆様が日々健闘されていることに感銘しております。保育園は園児のみならず、その保護者や地域の乳幼児を持つ家庭に対する“地域の食生活・情報の拠点”として期待されているのではないのでしょうか。それに応えるために、園で取り組んでいるていねいな対応をそのまま具体的に提示していただきたいと思います。その時、一般論については確かな科学的根拠に基づく理由を示してください。例えば、粉ミルクの水は、「日本核医学会、日本小児科学会等の見解を示し、だから我が地域では水道水を使用する（使用しない）」「ミネラルウォーターで代用する場合は、なぜ軟水がよいか説明し使用する」などです。

また、食物については近所で入手できる食料品の具体的な情報を、園の職員、地域の業者、近隣の栄養士・調理師仲間と情報交換しあい、専門家としてチェックしておきましょう。これらの情報は、家庭においても同様の実践ができるように、できるだけ具体的に発信してください。従来から実施されている「今日の給食の展示コーナー」も、それにあたると思います。長期戦になると思います。共に頑張りましょう。

高橋千恵子（フォーラム理事）

■公衆栄養分野で

災害に備えて、都道府県・市町村とも防災計画やマニュアルを策定し、万が一に備えています。1995年の阪神淡路大震災、2007年の新潟県中越沖地震等、これまで多くの大震災が各地で起きていますが、今回の地震は日本の地震観測史上最大で広範囲の地震と津波に加えて放射能汚染まで加わってしまいました。厚生労働省健康局からも各都道府県に、栄養・食生活支援の協力依頼が出され、近隣都道府県からは、迅速な応援派遣がされました。

現在も食料供給状況により、栄養状態に問題が起きている避難所もあり、支援活動に奮闘している行政管理栄養士・栄養士の情報が栄養分野間で発信されています。しかし、公衆衛生分野のネットワークには食の専門家としての情報発信が見当たらず、他職種からは活動が見えづらくなっています。食料が入手できるか、安全な食物、温かな食物、栄養バランスのよい食物、治療食等が食べられるかなど、課題の優先順位は時間とともに変化します。他職種や地域外の支援者と力を合わせて市民ニーズにあった的確な支援を行うためには、現在の情報を積極的に発信するとともに、地域の食・栄養に関する社会資源（自治会、NPO、食ボランティア、給食施設、食品企業等）情報や、特に弱者（傷病者・虚弱者・子どもや高齢者等）情報を関係者ととともに、日頃から把握し対応を準備しておくことが重要です。大変なときの小さな改善が積み重なったときに、大きな可能性として実現する方向に動くと考えられます。これか

ら長い復興活動が続きますが栄養・食生活は日常であり、食への満足感が得られれば人は希望を持って生活できます。人々が食事をして幸せと感じられ、健康を害することのない環境を他職種・他分野とともに整えることが、通常時の活動以上に求められているでしょう。

田中久子(女子栄養大学、フォーラム運営委員)

■国際援助の動向から

現在被災地では、日本人保健医療スタッフ、ボランティアに、国際協力経験者が数多く活動しています。今、大変厳しい生活状況にある人々の役に立ちたい、国際協力での経験や習得スキルを自国のために活かしたい、という気持ちからです。

国際ガイドライン(WFP)では、栄養・食料援助の進め方として、

- ①確実に人々に届ける輸送手段の確保
- ②必要な資金・食材料の手配(近隣地域における相互支援を促すことが重要)
- ③配給する栄養量(食料)の決定
- ④援助に必要な人・グループの決定と人数の把握
- ⑤長期的な展望での食料分配をあげています。

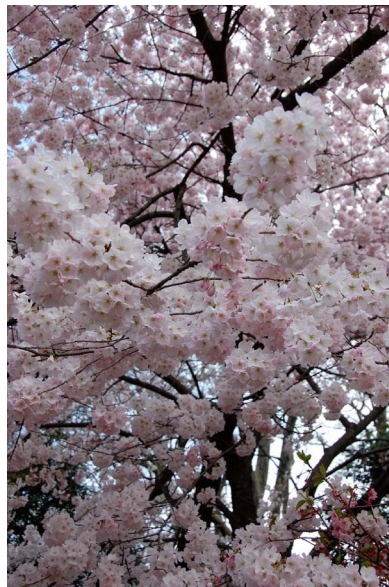
また、今回の災害により地元を離れて生活する方も多くいらっしゃいますが、その方々には、近い将来、地元に戻ることを想定した支援が重要になります。WFPでは、人々の食の復興の基盤になるものとして、学校給食、生産、労働(収入向上)、職業訓練を位置づけています。いわゆる栄養状態の改善のみならず、食をめぐる生活の改善が同時に進められることがとても重要であるとされているのです。しかし災害現場では、ガイドライン通りに進まないことも珍しくなく、さまざまな立場の個人やグループ、行政機関が連携すること、チームとしての心の管理(カウンセリングマインドの維持)が重要であるとされています。

北海道名寄市に住んでいる私も、被災されて避難生活をしている方の住居・生活・就業の確保についての支援活動をしています。その中で新たな学びは、専門家や友人や狭い地域のみで抱え込ま

ず、広域チームでの協力が支援全体をスムーズに進めさせるということです。

例えば、今回、岩手県で被災され名寄市に滞在しているAさんを、隣の市が臨時で雇用することになり、協力の輪が広がっています。それが結果的に多方面からの支援につながっています。今、Aさんは自身の生活を立て直しつつ、地元に戻り復興に役立ちたいという気持ちでおり、そのための間接的支援も行われつつあります。

石川みどり(名寄市立大学、フォーラム運営委員)



●2011年度総会・東京研修会のお知らせ

日時：5月22日(日)

総会 13:00～

研修会 14:00～17:00(予定)

会場：日本女子大学 新泉山館

講師：中嶋康博先生(東京大学准教授)

「生活者はフードシステムをどうとらえ、評価し、日常の食物選択や食環境づくりに活かすことができるか」(仮題)

皆さまのご参加をお待ちしております。

●会費納入のお願い

2011年度年会費を、同封の郵便局払込用紙か下記銀行口座宛に、5月20日までに、ご入金をお願いいたします。

[振込先] 三菱東京UFJ銀行・高田馬場支店(普) 1517770 特定非営利活動法人食生態学実践フォーラム 代表 足立己幸

●今年度事務局体制のお知らせ

開室日は昨年と同様、原則として、火曜日と金曜日の10:00～17:00ですが、スタッフは火曜日は東、金曜日は河合の二人体制となります。ご不便をおかけすることがあるかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

■被災地・仙台からの報告

震災から1か月たちました。テレビ等でもご覧のように、少しずつ復興に向かっているところもありますが、まだ目の前の状況に対応しているというのが現状だと思います。

日本栄養士会が気仙沼に入っています。また、大山さん(宮城学院女子大学教員、フォーラム正会員)と元県栄養士の教員が、宮城県栄養士会として、石巻や県南の山元町の栄養アセスメントなどに関わっています。今後、学科の学生を巻き込んだ活動に発展させていく予定です。

私は大学の地域連携センターで、災害復興ボランティアを立ち上げ、地元のニーズにあった活動を学生たちができる環境づくりをしています。先日、第1回の説明会をしたら、交通の便に限られるなか、200人もの学生が集まってくれて感激しました。担当している「炊き出し」班では、今週から、週1回のペースで石巻の病院スタッフの昼食支援を学生たちとすることになりました。

余震が続き、落ち着かない日々です。身近に人の死があり、悲しみがあります。ていねいに人と関わることの大切さを学んでいます。

平本福子(宮城学院女子大学、フォーラム理事)